

宅地建物取引業者等の監督処分基準

平成20年12月 3日 決裁

平成27年 3月17日 最終改正

(目的)

第1 この基準は、知事が、宅地建物取引業法（昭和27年法律第176号。以下「法」という。）第65条、第66条第1項第9号、第68条及び第68条の2第1項第4号又は第68条の2第2項第3号の規定に基づき、宅地建物取引業者（以下「業者」という。）又は宅地建物取引士（法第22条の2第1項の宅地建物取引士証の交付を受けた者をいう。）を監督処分するに当たり、その処分の公正を確保し、もって法の適正な運用を期することを目的とする。

(業者に対する監督処分)

第2 業者に対する監督処分は次のとおり行うものとする。

1 監督処分内容の決定等

(1) 監督処分の内容の決定手続

- ア 監督処分は、原則として、当該監督処分をしようとする日前5年間に当該業者がした違反行為に対しすることとする。
- イ 一の違反行為に対し監督処分をしようとする場合の監督処分の内容は、**第2.2**の規定に基づき定めることとする。なお、監督処分の内容が業務停止処分の場合、**第2.1(3)**の規定による加重の可否を判断して定めることとする。
- ウ 複数の違反行為に対し一の監督処分をしようとする場合の監督処分の内容は、各違反行為に対して**第2.2**の規定に基づき定めることとする。なお、監督処分の内容が業務停止処分の場合、**第2.1(2)**の規定による調整を行ったうえ、**第2.1(3)**の規定による加重の可否を判断して定めることとする。
- エ イ又はウの規定により定められた監督処分の内容については、斟酌すべき特段の事情がある場合に、これを加重又は軽減することを妨げない。

(2) 複数の違反行為に対し一の監督処分をしようとする場合の調整

- ア 複数の違反行為に対し一の監督処分をしようとする場合において、**第2.2**の規定により業務停止処分とすべき違反行為が複数含まれているときは、これらの違反行為に対する業務停止期間については、次の(ア)又は(イ)の日数のうち、

より短期である日数とする。

(ア) **第2.2**の規定に基づき定めた各違反行為に対する業務停止期間のうち最も長期であるものに、2分の3を乗じて得た日数（その日数に1日未満の端数があるときは、これを切り捨てるものとする。**第2.1(3)**並びに**第2.2(1)**ウ及びオにおいて同じ。）

(イ) **第2.2**の規定に基づき定めた各違反行為に対する業務停止期間を合計して得た日数

イ アの場合において、当該複数の違反行為（直接取引に係る違反行為に限る。）が複数の取引に係るものであるときにおけるア（ア）の規定の適用については、同規定中「2分の3」とあるのは、「2」とする。

(3) 違反行為を重ねて行った場合の加重

法第65条第2項又は第4項の規定による業務停止処分をしようとする場合において、当該処分の対象である違反行為のあった日（複数の違反行為に対し一の監督処分をしようとする場合にあつては、当該複数の違反行為のうち最も早期に発生した違反行為のあった日）前5年間に、当該業者が同条第1項若しくは第3項の規定による指示処分又は同条第2項若しくは第4項の規定による業務停止処分を受けていたときは業務停止期間について、**第2.2**の規定に基づき定めた日数（**第2.1(2)**の規定による業務停止期間の調整が行われたときは、当該調整後の日数）に2分の3を乗じて得た日数に加重することとする。

(4) 指示処分及び業務停止処分を一の監督処分によりしようとする場合の取扱い

法第65条第1項又は第3項の規定による指示処分及び同条第2項又は第4項の規定による業務停止処分を一の監督処分によりしようとする場合には、当該指示処分に係る指示書及び当該業務停止処分に係る業務停止命令書の双方を交付することとする。

(5) 業務停止を開始すべき時期

法第65条第2項又は第4項の規定による業務停止処分をしようとする場合には、直ちに業務を停止させなければ関係者の新たな損害が発生するおそれがあるとき、その他直ちに業務を停止させることが必要な特段の事情がある場合を除き、原則として、業務停止命令書の交付の日から起算して2週間を経過した日

を、業務停止の開始日として指定することとする。ただし、広告の撤収、関係者への連絡その他の業者による業務停止に向けた準備行為に2週間以上要すると見込まれる場合には、業務停止命令書の交付日から業務停止の開始日までの期間について、2週間以上とすることを妨げない。

(6) 指示処分をした後における調査等

法第65条第1項又は第3項の規定による指示処分をした場合においては、指示書に記載された内容に関する業者の実施状況について、必要に応じて、報告を求め、又は調査その他の所要の措置を講ずることとする。

(7) 業務停止期間中において禁止される行為及び許容される行為

ア 法第65条第2項又は第4項の規定による業務停止処分を受けた業者は、業務停止期間中において、業務停止の開始日前に締結された契約（媒介契約を除く。）に基づく取引を結了する目的の範囲内の行為を除き、宅地建物取引業に関する行為はできないこととする。

イ アの規定に基づき、業務停止期間中において禁止される行為及び許容される行為を例示すると、以下のとおりとなる。

(ア) 禁止される行為

- ① 広告（広告媒体の種類にかかわらず、名称又は所在地の表示等により宅地又は建物が特定可能な形で表示されているものに限る。）、宅地建物取引業の取引に関する電話照会に対する応対及び来客対応
- ② 媒介契約の締結及び更新並びに業務停止の開始日前に締結された媒介契約に係る業務の処理（業務停止の開始日前に締結された契約（媒介契約を除く。）の履行のため必要であることが明らかな媒介契約の更新及び媒介契約に係る業務の処理を除く。）
- ③ 申込証拠金の受領、契約の締結の申込みに対する承諾又は拒否の意思表示
- ④ 宅地又は建物の売買、交換又は賃借（自ら賃貸する場合を除く。）に関する契約の締結

(イ) 許容される行為

- ① 業務停止の開始日前に締結された契約（媒介契約を除く。）に基づく取引を結了する目的の範囲内の行為（物件の登記、引渡し等）
- ② 宅地又は建物を自ら賃貸する行為

- ③ 宅地の造成工事又は建物の建築工事、物件に係る建築確認又は開発許可の申請、資金の借入れ

(8) 監督処分の内容の公表

本基準に基づく監督処分のうち法第65条第1項及び第3項の規定による指示処分並びに同条第2項及び第4項の規定による業務停止処分並びに法第66条による免許取消処分をしたときは、次に掲げる事項について、ホームページへの掲載により処分日から5年間公表することとする。

- ア 当該処分をした日
- イ 当該処分を受けた業者の商号又は名称、主たる事務所の所在地代表者の氏名、免許番号
- ウ 当該処分の内容
- エ 当該処分の理由

(9) 地域を限定した業務停止処分

法第65条第2項及び第4項の規定による業務停止処分をしようとする場合においては、当該違反行為が県の区域内の一の事務所のみにおいて行われたものであり、当該違反行為があった時点において、当該業者の役員（法第5条第1項第2号に規定する役員をいう。）が、当該違反行為の存在を知らず、かつ、知らなかったことについてその責に帰すべき理由がないことが明らかであるときは、当該違反行為により関係者に重大な損害が発生し、又は発生するおそれが大であるとき、当該違反行為による社会的影響が大であるときその他地域を限定して業務停止処分をすることが不適切と認められる事情があるときを除き、以下の業務のみの停止を命ずることができる。

- ア 当該違反行為を行った事務所の業務
- イ 埼玉県内における当該業者の業務

(10) 監督処分の保留

違反行為の対象となると考えられる行為であって、事実の認定及び損害の程度について、関係者における訴訟等の判断を待つ必要があるときは、監督処分を保留することができる。

2 業者の各違反行為に対する監督処分基準

(1) 法第65条第2項第2号又は第4項第2号に規定する違反行為に対する監督処分

ア 業者が、法第65条第2項第2号又は第4項第2号に規定する違反行為（以下「2項2号、4項2号違反行為」という。）をした場合には、それぞれ同条第2項第2号又は第4項第2号の規定により、業務停止処分をすることができる。これらの場合において、業務停止期間については、別表1に定める日数に、必要に応じ、ウの規定による加重又はエ若しくはオの規定による軽減をして定めることとする。

イ 業者が、法第35条第1項から第3項及び第47条第1号の規定の双方に違反する行為をした場合におけるア後段の規定の適用については、同規定中「別表1に定める日数」とあるのは、「90日」とする。

ウ 2項2号、4項2号違反行為が、次に掲げる加重事由のいずれかに該当する場合には、業務停止期間について、別表1に定める日数に2分の3を乗じて得た日数に加重することができる。

(ア) 2項2号、4項2号違反行為により発生し、又は発生が見込まれる関係者の損害の程度が、特に大きい場合

(イ) 2項2号、4項2号違反行為の態様が、暴力的行為又は詐欺的行為による等、特に悪質である場合

(ウ) 2項2号、4項2号違反行為による違反状態が長期にわたっている場合

(エ) 2項2号、4項2号違反行為が及ぼす社会的影響が大きい場合

エ 2項2号、4項2号違反行為が次に掲げる事由のいずれかに該当するときは、法第65条第1項又は第3項の規定による指示処分に軽減することができる。

ただし、営業を目的とした名義貸し（法第13条第1項）、表示又は広告を目的とした名義貸し（法第13条第2項）、重要な事項に関する故意の不告知等（法第47条第1号）及び不当に高額報酬の要求（法第47条第2号）については、この軽減措置を適用することができない。

(ア) 当該2項2号、4項2号違反行為による関係者の損害が発生せず、かつ、今後発生することが見込まれない場合

(イ) 知事が当該2項2号、4項2号違反行為の存在を覚知するまで、又は知事の指摘に応じ、直ちに、業者が関係者の損害の補填に関する取組みを開始した

場合であつて、当該補填の内容が合理的であり、かつ、当該業者の対応が誠実であると認められる場合

(ウ) 知事が当該2項2号、4項2号違反行為の存在を覚知するまで、又は知事の指摘に応じ、直ちに違反状態を是正した場合（関係者の損害が発生した場合には、(イ)の事由にも該当する場合に限る。）

オ 2項2号、4項2号違反行為が、次に掲げる軽減事由のいずれかに該当するときは、業務停止期間について、別表1に定める日数に4分の3を乗じて得た日数に軽減することができる。

ただし、次に掲げる軽減事由のいずれかに該当し、かつウに掲げる加重事由のいずれかに該当した場合には、ウの規定による加重措置及びこの軽減措置は適用せず、別表1に定める日数を適用することとする。

また、営業を目的とした名義貸し（法第13条第1項）、表示又は広告を目的とした名義貸し（法第13条第2項）、重要な事項に関する故意の不告知等（法第47条第1号）及び不当に高額報酬の要求（法第47条第2号）については、この軽減措置を適用することができない。

(ア) 2項2号、4項2号違反行為により発生し、又は発生が見込まれる関係者の損害の程度が軽微である場合

(イ) 業者が、関係者の損害の全部又は一部を補填した場合（エ(イ)に該当する場合を除く。）

(2) 法の規定（法第65条第2項第2号及び第4項第2号に掲げる規定を除く。）

又は特定住宅瑕疵担保責任の履行の確保に関する法律（平成19年法律第66号。以下「履行確保法」という。）の規定に違反する行為に対する監督処分

業者が、法の規定（法第65条第2項第2号及び第4項第2号に掲げる規定を除く。）又は履行確保法第11条第1項若しくは第6項、第12条第1項、第13条、第15条若しくは履行確保法第16条において読み替えて準用する履行確保法第7条第1項若しくは第2項若しくは第8条第1項若しくは第2項の規定に違反する行為をした場合には、法第65条第1項本文又は第3項の規定により、指示処分をすることができる。

(3) 他の法令（履行確保法及びこれに基づく命令を除く。）に違反する行為に対する監督処分

業者が、業務に関し他の法令（履行確保法及びこれに基づく命令を除く。）に違反する行為をした場合には、原則として、法第65条第1項第3号又は第3項の規定により、指示処分をすることができる。

（４） 法令に違反する行為以外の行為に対する監督処分

ア 業者が、関係者に損害を与え、若しくは損害を与えるおそれが大である行為、又は取引の公正を害し、若しくは害するおそれが大である行為をした場合において、当該行為の態様が2項2号、4項2号違反行為と類似するものであるときは、当該2項2号、4項2号違反行為に係る第2.2（1）の規定に従い、原則として、法第65条第2項第5号又は第4項5号の規定により、業務停止処分をすることができる。

イ アに規定する場合を除き、業者が、関係者に損害を与え、若しくは損害を与えるおそれが大である行為、又は取引の公正を害し、若しくは害するおそれが大である行為（宅地建物取引業法その他の法令の規定に違反する行為を除く。）をした場合には、原則として、法第65条第1項第1号、第2号又は第3項の規定により、指示処分をすることができる。ただし、関係者の損害の程度又は社会的影響の程度が大である場合その他指示処分とすることが不適切と認められる特段の事由がある場合に、同条第2項第5号又は第4項第5号の規定により、業務停止処分をすることを妨げない。

（５） 指示処分に従わない場合等における監督処分

ア 業者が、法第65条第1項又は第3項の規定による指示の内容に従わなかった場合には、同条第2項第3号又は第4項第3号の規定により、15日の業務停止処分をすることとする。

イ 業者が、法第72条第1項の規定に違反して、次のいずれかに該当する違反行為をした場合には、法第65条第2項第4号又は第4項第4号の規定により、15日の業務停止処分をすることとする。

（ア） 法第72条第1項の規定による報告提出命令に対し、報告若しくは資料の提出をせず、又は虚偽の報告若しくは虚偽の資料の提出をした場合

（イ） 法第72条第1項の規定による立入検査に対し、これを拒み、妨げ、又は忌避した場合

(6) 特に情状の重い違反行為等に対する監督処分

業者が、次のいずれかに該当する違反行為をした場合には、法第66条第1項第9号の規定により、免許取消処分をすることとする。

- ア 第2. 2(1)から(5)までの規定により業務停止処分の対象となる違反行為であって、当該違反行為の情状が特に重い場合
- イ 業務停止期間中に、処分前に締結された契約（媒介契約を除く。）に基づく取引を結了する目的の範囲内の行為を除き、宅地建物取引業に関する行為をした場合

(宅地建物取引士に対する監督処分)

第3 宅地建物取引士に対する監督処分は次のとおり行うものとする。

1 監督処分内容の決定等

(1) 監督処分の内容の決定手続

- ア 監督処分は、原則として、当該監督処分をしようとする日前5年間に当該宅地建物取引士がした違反行為に対しすることとする。
- イ 一つの違反行為に対し監督処分をしようとする場合の監督処分の内容は、第3. 2の規定に基づき定めることとする。なお、監督処分の内容が事務禁止処分の場合は、第3. 1(3)の規定による加重の要否を判断して定めることとする。
- ウ 複数の違反行為に対し一の監督処分をしようとする場合の監督処分の内容は、各違反行為に対して第3. 2の規定に基づき定めることとする。なお、監督処分の内容が事務禁止処分の場合は、第3. 1(2)の規定による調整を行ったうえ、第3. 1(3)の規定による加重の要否を判断して定めることとする。
- エ イ又はウの規定により定められた監督処分の内容については、斟酌すべき特段の事情がある場合に、これを加重又は軽減することを妨げない。

(2) 複数の違反行為に対し一の監督処分をしようとする場合の調整

- ア 複数の違反行為に対し一の監督処分をしようとする場合において、第3. 2の規定により事務禁止処分とすべき違反行為が複数含まれているときは、これらの違反行為に対する事務禁止期間については、次の(ア)又は(イ)の日数のうち、より短期である日数とする。

(ア) 第3. 2の規定に基づき定めた各違反行為に対する事務禁止期間のうち最

も長期であるものに、2分の3を乗じて得た日数（その日数に1日未満の端数があるときは、これを切り捨てるものとする。）

(イ) **第3. 2**の規定に基づき定めた各違反行為に対する事務禁止期間を合計して得た日数

イ アの場合において、当該複数の違反行為（直接取引に係る違反行為に限る。）が複数の取引に係るものであるときにおけるア（ア）の規定の適用については、同規定中「2分の3」とあるのは、「2」とする。

(3) 違反行為を重ねて行った場合の加重

法第68条第2項又は第4項の規定による事務禁止処分をしようとする場合において、当該処分の対象である違反行為のあった日前5年間に、当該宅地建物取引士が同条第1項若しくは第3項の規定による指示処分又は同条第2項若しくは第4項の規定による事務禁止処分を受けていたときは、事務禁止期間について、**第3. 2**の規定に基づき定めた日数に2分の3を乗じて得た日数（その日数に1日未満の端数があるときは、これを切り捨てるものとする。**第3. 2**（1）イにおいて同じ。）に加重することとする。

(4) 指示処分及び事務禁止処分を一の監督処分によりしようとする場合の取扱い

法第68条第1項又は第3項の規定による指示処分及び同条第2項又は第4項の規定による事務禁止処分を一の監督処分によりしようとする場合には、当該指示処分に係る指示書及び当該事務禁止処分に係る事務禁止命令書の双方を交付することとする。

(5) 事務禁止を開始すべき時期

法第68条第2項又は第4項の規定による事務禁止処分をしようとする場合には、直ちに業務を停止させなければ関係者の新たな損害が発生するおそれが大であるとき、その他直ちに業務を停止させることが必要な特段の事情がある場合を除き、原則として、事務禁止命令書の交付の日から起算して2週間を経過した日を、事務禁止の開始日として指定することとする。ただし、関係者への連絡その他事務禁止に向けた準備行為に2週間以上要すると見込まれる場合には、事務禁止命令書の交付日から事務禁止の開始日までの期間について、2週間以上とすることを妨げない。

(6) 事務禁止期間中において禁止される行為及び許容される行為

法第68条第2項又は第4項の規定による事務禁止処分を受けた宅地建物取引士が行うことができない事務は、宅地建物取引士としてすべき事務であるが、事務禁止期間中において、禁止される事務及び許容される事務を例示すると、以下のとおりとなる。

ア 禁止される事務

(ア) 法第35条に規定する事務。

(イ) 法第37条に規定する事務。

イ 許容される事務

総務・経理等一般の事務。

2 宅地建物取引士の違反行為に対する監督処分基準

(1) 法第68条第1項各号又は第3項に規定する違反行為に対する監督処分

ア 宅地建物取引士が、法第68条第1項各号又は第3項に規定する違反行為（以下「1項各号、3項違反行為」という。）をした場合には、同条第2項又は第4項の規定により、事務禁止処分をすることができる。この場合において、事務禁止期間については、別表2に定めるとおりとする。

イ 1項各号、3項違反行為が、次に掲げる加重事由のいずれかに該当する場合には、事務禁止期間について別表2に定める日数に2分の3を乗じて得た日数に加重することができる。

(ア) 1項各号、3項違反行為により関係者の損害が発生し、又は発生が見込まれ関係者の損害の程度が特に大きい場合

(イ) 1項各号、3項違反行為の態様が、暴力的行為又は詐欺的行為による等、特に悪質である場合

(ウ) 1項各号、3項違反行為による違反状態が長期にわたっている場合

(エ) 1項各号、3項違反行為が及ぼす社会的影響が大きい場合

ウ 1項各号、3項違反行為が次に掲げる事由のいずれかに該当するときは、当該事務禁止処分を指示処分に軽減することができる。ただし、他業者等への名義貸しについては、原則としてこの軽減措置を適用しないものとする。

(ア) 当該1項各号、3項違反行為による関係者の損害が発生せず、かつ、今後発生することが見込まれない場合

(イ) 知事が当該1項各号、3項違反行為の存在を覚知するまで、又は知事の指摘に応じ、直ちに、関係者の損害の補填に関する取組みを開始した場合であつて、当該補填の内容が合理的であり、かつ、当該宅地建物取引士の対応が誠実であると認められる場合

(ウ) 知事が当該1項各号、3項違反行為の存在を覚知するまで、又は知事の指摘に応じ、直ちに違反状態を是正した場合(関係者の損害が発生した場合には、**第3.2(1)(イ)**の事由にも該当する場合に限る。)

(2) 指示処分に従わない場合における監督処分

宅地建物取引士が、法第68条第1項又は第3項の規定による指示の内容に従わなかった場合には、同条第2項又は第4項の規定により、15日の事務禁止処分にすることとする。

(3) 特に情状の重い違反行為等に対する監督処分

ア 宅地建物取引士が、**第3.2(1)**から**(2)**までの規定により事務禁止処分の対象となる違反行為をした場合であつて、当該違反行為の情状が特に重い場合には、法第68条の2第1項第4号の規定により、登録の消除をすることとする。

イ 法第18条第1項の登録を受けている者で宅地建物取引士証の交付を受けていないものが、宅地建物取引士としてすべき事務を行い、情状が特に重い場合には、法第68条の2第2項第3号の規定により、登録の消除をすることとする。

第4 施行期日等

- 1 この基準は、平成21年4月1日から施行する。
- 2 違反行為の軽重及び態様、違反行為後の宅地建物取引業者の措置状況等を総合的に勘案したうえで、監督処分に至らない違反行為については、法第71条の規定により、必要な指導、助言又は勧告をすることとする。

改正履歴	平成22年	4月	1日	施行
	平成24年	1月	18日	施行
	平成27年	4月	1日	施行

(別表1) 法第65条第2項第2号及び同条第4項第2号に規定する違反行為に対する標準の業務停止期間

違反行為の概要		業務停止期間の日数
1. 営業を目的とした名義貸し	法第13条第1項の規定に違反して、他人の営業のために名義貸しをした場合。	90日
2. 表示又は広告を目的とした名義貸し	法第13条第2項の規定に違反して、他人の表示又は広告のために名義貸しをした場合。	15日
3. 専任宅地建物取引士の設置義務違反	法第31条の3第3項の規定に違反して、専任宅地建物取引士の設置に関し必要な措置をとらなかった場合。	7日
4. 営業保証金の供託等に関する義務違反	次のいずれかに該当する場合。 ① 法第25条第5項（法第26条第2項において準用する場合を含む。）、法第28条第1項、法第64条の15前段又は法第64条の23前段の規定に違反して、必要な営業保証金を供託しなかった場合。 ② 法第64条の9第2項の規定に違反して、必要な弁済業務保証金分担金を納付しなかった場合。 ③ 法第64条の10第2項の規定に違反して、必要な還付充当金を納付しなかった場合。 ④ 法第64条の12第4項の規定に違反して、必要な特別弁済業務保証金分担金を納付しなかった場合。	30日
5. 誇大広告等の禁止違反	(1) 法第32条の規定に違反して、誇大広告等をした場合（(2)の場合を除く。）。	7日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合（(3)の場合を除く。）。	15日
	(3) (2)の場合において、当該関係者の損害の程度が大であると認められる場合。	30日
6. 自己の所有に属しない宅地又は建物の売買契約締結の制限違反	(1) 法第33条の2の規定に違反して、自己の所有に属しない宅地又は建物について、売買契約（予約を含む。）を締結した場合（(2)の場合を除く。）。	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日

7. 取引態様の明示義務違反	法第34条の規定に違反して、取引態様の別を明示しなかった場合。	7日
8. 媒介契約締結時における書面の交付義務違反	次のいずれかに該当する場合。 ① 法第34条の2第1項（法第34条の3において準用する場合を含む。②において同じ。）の規定に違反して、媒介契約の締結時に書面を交付しなかった場合。 ② 法第34条の2第1項の書面について、同項各号に掲げる事項の一部を記載せず、又は虚偽の記載をした場合。	7日
9. 価額について意見を述べる際の根拠の明示義務違反	法第34条の2第2項（法第34条の3において準用する場合を含む。）の規定に違反して、宅地又は建物を売買すべき価額又はその評価額について意見を述べるときに、その根拠を明らかにしなかった場合。	7日
10. 重要事項説明義務違反	(1) 次のいずれかに該当する場合（(2)の場合を除く。）。 ① 法第35条第1項から第3項の書面に、同条第1項から第3項までの各号に掲げる事項の一部を記載せず、又は虚偽の記載をした場合。 ② 法第35条第1項から第3項の書面は交付したものの、説明はしなかった場合。 ③ 宅地建物取引士以外の者が、法第35条第1項から第3項の規定による重要事項説明をした場合。	7日
	(2) (1) ①から③までのいずれかに該当する場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合（(3)の場合を除く。）。	15日
	(3) (2)の場合において、当該関係者の損害の程度が大であると認められる場合。	30日
	(4) 法第35条第1項から第3項の規定に違反して、同条第1項から第3項の書面を交付しなかった場合（(5)の場合を除く。）。	15日
	(5) (4)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合（(6)の場合を除く。）。	30日

	(6) (5) の場合において、当該関係者の損害の程度が大であると認められる場合。	60日
1 1. 契約締結等の時期の制限違反	(1) 法第36条の規定に違反して、工事に関し必要とされる開発許可、建築確認その他の処分を取得する前に、売買契約の締結をした場合（(2) の場合を除く。）。	15日
	(2) (1) の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
1 2. 売買契約等の締結時における書面の交付義務違反	法第37条第1項又は第2項の書面に、同条第1項各号又は第2項各号に掲げる事項の一部を記載せず、又は虚偽の記載をした場合。	7日
	法第37条第1項又は第2項の規定に違反して、同条第1項又は第2項の書面を交付しなかった場合。	15日
1 3. 手付金等の保全義務違反	(1) 法第41条第1項又は第41条の2第1項の規定に違反して、必要な保全措置を講じずに手付金等を受領した場合（(2) の場合を除く。）。	15日
	(2) (1) の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
1 4. 所有権留保等の禁止違反	(1) 法第43条第1項若しくは第3項の規定に違反して、登記その他引渡し以外の売主の義務を履行しなかった場合、又は、同条第2項若しくは第4項の規定に違反して、担保の目的で宅地若しくは建物を譲り受けた場合（(2) の場合を除く。）。	15日
	(2) (1) の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
1 5. 不当な履行の遅延	法第44条の規定に違反して、宅地若しくは建物の登記若しくは引渡し又は取引に係る対価の支払いを不当に遅延させた場合。	30日
1 6. 秘密を守る義務違反	法第45条の規定に違反して、秘密を他に漏らした場合。	15日
1 7. 限度額を超える報酬の受領	法第46条第2項の規定に違反して、限度額を超えて報酬を受領した場合。	15日
1 8. 重要な項目に関する故意の不告知等	法第47条第1号の規定に違反して、重要な事項について、故意に事実を告げず、又は不実のことを告げた場合。	90日

19. 不当に高額な報酬の要求	法第47条第2号の規定に違反して、不当に高額な報酬を要求した場合。	30日
20. 手付の貸与等による契約締結の誘因	(1) 法第47条第3号の規定に違反して、手付の貸与等により契約の締結を誘引した場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
21. 契約締結の勧誘時における将来利益に関する断定的判断の提供	(1) 法第47条の2第1項の規定に違反して、契約の締結の勧誘をするに際し、利益を生ずることが確実であると誤解させるべき断定的判断を提供した場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
22. 契約締結等を目的とした業者の相手方等に対する威迫	(1) 法第47条の2第2項の規定に違反して、契約の締結等を目的として、業者の相手方等を威迫した場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
23. 契約締結の勧誘時における将来の環境又は利便に関する断定的判断の提供	(1) 法第47条の2第3項及び規則第16条の12第1号イの規定に違反して、契約の締結の勧誘をするに際し、将来の環境又は交通その他の利便について誤解させるべき断定的判断を提供した場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
24. 契約締結の勧誘時における判断に必要な時間の付与拒否	(1) 法第47条の2第3項及び規則第16条の12第1号ロの規定に違反して、契約の締結の勧誘をするに際し、契約を締結するかどうかを判断するために必要な時間を与えることを拒んだ場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日

25. 勧誘に先立って業者名、担当者名、勧誘目的を告げずに勧誘	法第47条の2第3項及び規則第16条の12第1号ハの規定に違反して、契約の締結の勧誘をするに際し、勧誘に先立って、業者名、担当者名、勧誘目的を告げずに勧誘を行った場合。	7日
26. 相手方等が契約を締結しない旨等の意思表示をした場合の再勧誘	(1) 法第47条の2第3項及び規則第16条の12第1号ニの規定に違反して、契約の締結の勧誘をするに際し、相手方等が契約を締結しない旨等の意思を表示したにもかかわらず勧誘を継続した場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
27. 迷惑を覚えさせるような時間の電話又は訪問による勧誘	(1) 法第47条の2第3項及び規則第16条の12第1号ホの規定に違反して、契約の締結の勧誘をするに際し、迷惑を覚えさせるような時間に電話勧誘又は訪問勧誘を行った場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
28. 私生活又は業務の平穩を害する方法による契約締結の勧誘	(1) 法第47条の2第3項及び規則第16条の12第1号ヘの規定に違反して契約の締結の勧誘をするに際し、私生活又は業務の平穩を害するような方法によりその者を困惑させた場合((2)の場合を除く。)	15日
	(2) (1)の場合において、当該違反行為により関係者の損害が発生した場合。	30日
29. 契約申込みの撤回時における預り金の返還拒否	法第47条の2第3項及び規則第16条の12第2号の規定に違反して、預り金を返還することを拒んだ場合。	15日
30. 正当な理由のない契約解除の拒否等	法第47条の2第3項及び規則第16条の12第3号の規定に違反して、正当な理由なく、契約の解除を拒み、又は妨げた場合。	30日
31. 証明書不携帯時における従事者の業務従事	法第48条第1項の規定に違反して、証明書を携帯させずに、従業者をその業務に従事させた場合。	7日

3 2. 従事者名簿の不備	法第48条第3項の規定に違反して、従業者名簿を備えず、又は規則第17条の2第1項各号に掲げる記載事項の一部を記載しなかった場合。	7日
3 3. 履行確保法の規定に基づく保証金の供託に関する義務違反	履行確保法第11条第1項の規定に違反して、必要な住宅販売瑕疵担保保証金の供託を行わなかった場合。	7日
3 4. 履行確保法の規定に基づく新築住宅の売買契約締結禁止違反	履行確保法第13条の規定に違反して、基準日の翌日から起算して50日を経過した日以降において、新たに自ら売主となる新築住宅の売買契約を締結した場合。	15日
3 5. 履行確保法の規定に基づく不足額の供託に関する義務違反	履行確保法第16条において読み替えて準用する第7条第1項の規定に違反して、不足した住宅販売瑕疵担保保証金の供託を行わなかった場合	7日

(別表2) 法第68条の規定に該当する行為に対する標準の事務停止期間 (第3. 2関係)

違反行為の概要		事務停止期間の日数
1. 専任宅地建物取引士としての名義の使用	自己が専任の宅地建物取引士として従事している事務所以外の事務所に専任の宅地建物取引士である旨の表示をさせた場合 (法68条第1項第1号)。	90日
2. 他人への自己名義の使用許可	他人に自己名義の使用を許し、当該他人がその名義を使用して宅地建物取引士である旨の表示をした場合 (法第68条第1項第2号)。	60日
3. 宅地建物取引士の事務に関する不正又は著しく不当な行為	宅地建物取引士として行う事務に関し不正又は著しく不当な行為をした場合 (法第68条第1項第3号)。	30日